

秋成文学の世界

萱沼紀子著

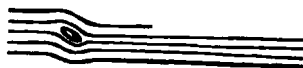
笠間選書 118



秋成文学の世界

萱沼紀子著

笠間選書 118



笠間書院

萱沼 紀子 (かやぬま のりこ)

1940年山梨県に生まる。

1967年東京大学大学院博士課程国語国文学科を経て、
1967年4月から、作新学院女子短期大学及び跡見学園
女子大学に勤め、現在に至る。

現住所 埼玉県和光市南2-1-2-503

著書

1972年 日本の古典「新井白石・本居宣長」註訳 (河
出書房新社)

1977年 「日本文学史5, 近世の文学(下)」共著 (有
斐閣選書)

1978年 「和歌文学の世界 第六集」共著 (笠間選書)

笠間選書118 秋成文学の世界

昭和54年3月20日初版第1刷発行

定価 1500円

— 検印省略 —

著者 萱沼紀子©

発行者 池田猛雄

印刷 三美印刷

製本 笠間製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区神田神保町1-46

電話 03-295-1331(代) 振替東京 1-56002

書籍コード 1391-953118-0924

序 章

第一章

病誌学よりみた秋成文学の特徴

二七

第一節

秋成の病跡

二七

第二節

秋成の苦悩

三〇

——発作の心因をさぐる——

第三節

病誌学よりみた秋成文学の特徴

四二

第二章 『雨月物語』の世界

五〇

序 節

構成上の問題

五〇

第一節

歴史と虚構

五三

(1) 白峯

五三

(2) 仏法僧

五九

(3) 貧福論

六三

(4) まとめ

六九

第二節 悲劇美の追求	八〇
------------	----

(1) 菊花の約	八〇
----------	----

(2) 浅茅が宿	八七
----------	----

(3) まとめ	九五
---------	----

第三節 封建倫理の再建	九八
-------------	----

(1) 古備津の釜	九八
-----------	----

(2) 蛇性の姪	一〇五
----------	-----

(3) まとめ	一二〇
---------	-----

第四節 求道の心	一二七
----------	-----

——青頭巾——

第三章 『春雨物語』の世界	一三四
---------------	-----

序節 構成上の問題	一三四
-----------	-----

(1) 目ひとつの神	一三四
------------	-----

(2) 歌のはまれ	一三八
-----------	-----

第一節 歴史物の意図……………一三三

(1) 血かたびら……………一三三

(2) 天津処女……………一四五

(3) 海賊……………一五〇

(4) まとめ……………一五四

第二節 美の追求と倫理の徹底……………一六一

(1) 死首の咲顔……………一六一

(2) 宮木が塚……………一七二

(3) まとめ……………一七七

第三節 救済への道……………一八〇

(1) 二世の縁……………一八〇

(2) 捨石丸……………一八七

(3) 樊噲……………一九四

(4) まとめ……………二〇六

結 章

秋成文学の世界	三二
---------	----

第一節 秋成の思想的特質	三二
--------------	----

(1) 問題の所在	三二
-----------	----

(2) 秋成の儒仏批判の構造	三三
----------------	----

(3) 秋成の社会観	三〇
------------	----

(4) 秋成の歴史観	三三
------------	----

(5) 秋成の思想的特質	三七
--------------	----

第二節 秋成文学の世界	三〇
-------------	----

——結びにかえて——

あとがき	三四
------	----

序 章

1

上田秋成の文学、とくに『雨月物語』は、その幻想的にして浪漫的な題材と、和漢の古典の知識を駆使した文体とによって、多くの愛読者を獲得してきた。秋成は当時からすでに『近世畸人伝』に採られており、伝説的興味の対象とされていた。その強い個性の故に、現在でも多くの文学者の好むところであり、又数多くの研究者の関心をもさそっている。現在までの諸研究をまとめてみると、高田衛氏の『上田秋成年譜考説』（一九六四年、明善堂）や『上田秋成研究序説』（一九六八年、寧良書房）の如き、基礎的研究の中にすぐれた成果がみられる。だが、重友毅氏の『秋成の研究』（一九七一年、文理書院）や中村幸彦氏の『近世作家研究』（一九六一年、三一書房）、その他鵜月洋、森山重雄、中村博保氏らの多くの研究にみられる特徴は秋成を国学思想の持ち主とし、『雨月物語』や『春雨物語』を国学思想の表現として理解されるところにある。かかる見解は、国学思想なるものの本質を理解せず、たんに近世封建思想に対立する思想とみなし、秋成の文学を反封建的で、人間性を追求せんとしたドラマ

という極めて安易な世界に閉じこめることになる。このような観方には、次の二つのことから難点がある。一つには、国学思想の理解に欠けている点である。二つには、秋成の思想が果して国学なのかという点である。従来、秋成が賀茂真淵の門人である加藤宇万伎（まき）に古典の教えを乞うたという事実から、いとも簡単に秋成を国学者としてきた。そして、国学者であるからには、当然反儒教、反仏教の立場をとるものと予断してきた。

だが、最近では鷲山樹心、大輪靖宏氏等は、秋成の思想を単純に反儒、反仏と解すべきではないと、詳しく論じておられる。しかし、両氏とも、依然、秋成を国学者として解される点については、変わらないが。

筆者は、国学思想が反封建性に通ずるものではなく、安易に人間性の開放といった図式でみることはできないと、考える。国学思想とはすこぶる政治性の強いイデオロギーであり、そして又当時の社会を反映したものである。秋成の思想を検討するならば、それが国学と異質であることが明らかとなる。従って、『雨月物語』や『春雨物語』を国学思想の表現されたものとみることが、誤ちであると言えよう。筆者は、そうした従来の諸説とは異った見方から、秋成の文学を理解したい。

先にあげた大輪靖宏氏が『上田秋成文学の研究』（一九七一年、笠間書院）で、秋成文学の本質への理解を強調され、新しい研究を志向されたことは、評価してよいだろう。だが、氏は、作者の創作の意図をさぐるよりも、むしろ読者の側からの作品理解を、あえて試みられた。筆者は氏の右のような立場には反対である。確かに読者が作品をどう受けとめるかも大事ではあるが、その前に、作者の意図

に沿って理解することが基本であろう。我々が文学を語る場合、作品から作者の個性を読みとらねばならない。作者の個性を探り得ずして、作品がどう感ぜられるかに重点をおくならば、たんなる印象批評に墮する恐れがある。我々が作者の内面を探り、それがどう作品に表現されているかを知りえてこそ、作品の理解が始まるからである。

作者自身を知るために、資料的に研究することが不可欠であろう。だが、その人の伝記が完璧に近くなったからといって、彼の内面まで知りえたことにはならない。近代文学の研究において、研究者達は作家の個を見極めるために、様々な試みをしている。その一つに病誌学の方法を採用したものである。これはS・フロイトが精神分析の立場から試みた『芸術論』の中で、カオス的なドストエフスキー文学に新たな解釈が加えられて以来、盛んになってきた。

今、筆者は上田秋成を理解するにあたって、この病誌学の方法を採用したいと考えている。秋成の場合、幸いなことに『胆大小心録』や『癰癰談』^{くもものかた}その他の随筆中に、彼の内面がまことによく語られている。これらには又、秋成の病気の跡もはっきりとうかがわれる。そのことによって、秋成は癰癰の病気を身に負うており、そのために彼の精神は人一倍、苦悩しつづけたことがわかる。こうした秋成の状況を知るならば、彼の文学が彼の内面との深い関り合いなしに成り立ちうるものでないことが知られよう。そして又、この特異な苦悩を負った作家であるがために、病誌学的研究は秋成文学の理解にとって、重要な意味をもつのである。彼の作品が、その病的な苦悩の底から芸術的高みへと引きあげられる過程を理解することなしに、秋成の文学を論ずることはできないと言っても過言ではない。

だろう。こうして見ると、秋成の文学を、幻想的、浪漫的な美の世界として評価することは、あまりにも軽薄ではなからうか。又、ある思想的な表現のために作品を書いたとする、直線的な理解は、秋成文学の本質に迫ったものとは言えない。

上田秋成の文学を病誌学から捉え、又彼の作品を癲癇症との関係から論じたものは殆んどない。たゞ、大場俊助氏の『秋成のテンカン症とデーモン』（一九六九年、芦書房）があるのみだ。氏はこの著書の中で、秋成の病跡が各作品中にどのようにあらわれているかについて、詳しく分析された。だが、大場氏の研究について、筆者はその基本的な事柄に幾つかの疑問を感じている。第一に、大場氏は癲癇質性格と精神発作とを区別しておられないことである。怒りっぽいとか、攻撃性を示すとか、情緒不安定とか、むしろ性格として解すべきもので、氏はことごとく精神発作とされる。第二には、作品中に出てくる夢とか、幽霊とかいった幻想的なことは、秋成の病氣からくる幻覚や幻聴であることごとく解される点である。このように解したら、文学的虚構や技巧など一切認められなくなってしまう。第三に、大場氏は癲癇症の外面的な特徴から理解しておられ、秋成の内面を理解しようという姿勢に欠けておられる。このような点から、大場氏の『秋成のテンカン症とデーモン』なる研究は、その目的が秋成文学の創造性の秘密を彼の癲癇症に求めるところにあったのだが、病誌学的方法が有効に用いられたものとは言いがたい。大場氏が癲癇者への内面理解をされなかったが故に、氏の著書の分析は全体的に表面的すぎる。

たとえば、夢に例をとってみよう。確かに大場氏の言われる如く、秋成の作品には夢を使った場面

が出てくる。夢か、うつつかといった状態は『雨月物語』などでしばしば出るところがある。そして又、癲癩症の見る夢は、通常人より鮮明であり、現実感の強いものが登場する頻度も高い。『よもつ文』、『哭^ミ梅^ウ厓^イ子^シ』などは、秋成が見た夢をそのまま描いた小文である。その現実感に強い衝撃を与えている。だが、秋成は夢をあくまで作品の素材として扱い、又舞台設定として利用するのであって、夢が作品中での重要な暗示的役割を果たしたり、登場人物の精神状況を示したりすることはない。つまり、夢は秋成の作品では本質的な役割を果たすものではないということだ。同じく癲癩者であったドストエフスキーの作品と比べるならば、大きな違いである。彼の場合には夢が作品のキー・ポイントとなるべき暗示的な位置を占めている。又大発作直前にひきおこされるアウラ（恍惚状態）という一種の精神発作が創作に重要な力を与えており、幻覚や幻聴が、彼の運命を告げるかのように、作品に登場する。けれども、秋成の場合、ドストエフスキーと同じようなアウラの体験は見出だせないし、ドストエフスキーと同じような夢の扱い方は登場しない。秋成の癲癩者としての特徴は、彼の作品に決定的な影響を与えたのだが、もっと内面から理解しなければならぬ。

さて、こういうわけで秋成の文学を理解するために病誌学の方法を援用するのだが、筆者は精神医学の専門家ではないので、当然、幾つかの研究成果を利用することになる。まずF・ミンコフスカの癲癩学の成果を借りようと思う。ミンコフスカ女史の研究は、類癲癩性性格の特徴が、癲癩者の性格の延長線上にあることを、多くの症例から論じたものである。現在、癲癩質性格と一般に言うときには、このミンコフスカの説から出た類型である。彼女の研究については、本論第一章で詳しく述べる

つもりであるから、こゝでは彼女が癲癇性芸術の特徴として述べたことをまとめておきたい。ミンコフスカはヴァン・ゴッホの病理学的伝記の研究によって、癲癇性芸術家の本質的特徴を明らかにしたのだった。それによると、癲癇性芸術の表現様式は「単調で連続的なくり返し」やディーテイルな部分への「綿密」な傾向、即ち装飾的傾向がみられるといい、さらに「基礎へ、大地へ、深淵へ、また下層へと重苦しくひきつけているところの重量感」に特徴がある、という。そして平静で停滞した状況が、突然の激しい興奮や破壊的な力によってうち破られる。このミンコフスカの述べた癲癇性芸術の特徴は、ドストエフスキー文学についても言うことができる。「ときとして読者をうんざりさせるような、この単調で冗長な記述、それでいて読者を意識の深層へとひきいていく粘っこい筆力、衝動的なものを無気味にはらんだままのカオスの世界への沈潜、それと同時にキリストをも受胎しうるかと思われる聖ロシアの大地、息づまる嫉妬と憤怒の情念のうっ積、稲妻と雷鳴と落雷をともしなうエクスタシーの一時、賭博と殺人と滅亡への、そして不条理にも同時に世界融和と浄化への激しい衝動、世界没落と復活の予言者の靈感」⁽³⁾といったドストエフスキー文学を、説明しうる特徴となろう。

このミンコフスカの研究を手がかりとして秋成文学の特徴を考えていこうというのだが、秋成の内面を理解するには、ミンコフスカの類型を借用するだけでは不十分である。そこで、最近の癲癇学一派であるハイデルベルク学派の理論を参考にしたいと考えている。癲癇学は脳波学の進歩によって臨床面が重視されてきた。分裂症や神経症において患者の心因をさぐることが重んじられていたのに対し、従来、癲癇性発作には心因はないと考えられていた。ところがハイデルベルク学派の理論によ

ると、癲癇を「ことばの深い意味における内因性疾患、すなわちエンドンの病」⁽⁴⁾とみなし、発作と状況との相関関係を観察することによって患者の心因をさぐろうとした。こうして心因をさぐり、その発病の跡をたどることによって、人間の内面をより深層から理解しようというのが、ハイデルベルク学派の理論である。

今、上田秋成の内面をさぐるにはまさにこのハイデルベルク学派の方法が適していると筆者は考えた。この方法により、秋成の発病の心因をさぐることによって、彼の文学の原点を見出だしたいと願っている。

2

ここで上田秋成の生涯を簡単に紹介しよう。彼は享保十九年に生まれたが、実父を知らず、実母とも別れ、四才のとき、堂島永来町の紙油商、上田茂助の養子となった。幼名を仙次郎、本名を東作（又は藤作）と言った。

秋成の実母については曾根崎の遊女であったという説が長く信じられていたが、高田衛氏の研究によると、秋成の晩年に成った『麻知文』にみえる庄屋を勤めるいとこの姉妹であったろうとされ、実父については旗本の小堀左門政報ではないか、とされた。この高田氏の説の方が可能性が高い。

さて、秋成は四才のときから上田家の人となったのだが、養父母は彼を愛し、実子である姉と、何のわけへだてなく育てた。否、むしろ姉より大事にされたと見てもよい。彼は養子となった翌年、天

然痘をわずらい、養父母の厚い看護で九死に一生を得たが、このときの後遺症で秋成は右手の中指と左手の人指し指とが短かくなってしまった。その後、養母が急に亡くなり、すぐ二度目の養母が迎えられた。だが、六才の頃から彼は「驚癇」をおこすようになった、という。病弱な子供となってしまう秋成は、二度目の養母の手で熱心に養育された。

青年期の秋成は、後に自ら述懐しているように、放蕩をかさね、しばしば家に帰らぬこともあるような生活ぶりだった。学問については二十才過ぎ頃から高井几圭に俳諧の指導をうけたり、漢籍を読んだりしたが、系統だった学問は一切しなかった。二十七才で植山たまと結婚したが、翌年には実子であった姉の死に続いて、養父が急逝した。そこで秋成は養母や妻に助けられながら、上田家を嗣いだのだった。だが、家業にはあまり熱心ではなく、盛んに読書にふけり、彼は三十三才の明和三年『諸道聴耳世間猿』五卷、翌四年『世間妾形氣』の八文字屋風の浮世草子二作を出版した。そして、この頃、かねてより日本の古典に興味を覚えていた秋成は建部綾足を介して、加藤美樹（宇万伎）の弟子となった。ここで秋成は初めての体系的な学問にふれることになる。その後、安永六年六月十日に、美樹が大坂で客死するまでの、ほぼ十年間、秋成は美樹をのみ指導者として仰ぐことになる。

明和五年、秋成三十五才の折に成った『雨月物語』は彼の最高の傑作と言いうるものだろう。だが、こうした呑気な文筆生活も長くは続かなかった。明和八年、火災のため全財産を失った秋成は即座に新しく生計を立てる道をさがさねばならなくなった。そこで、彼は医者になろうと都賀庭鐘に学ぶ。安永四年、秋成は四十二才のとき、大坂に医者として独立した。彼は医師としての腕に自信がなかった

ものの、真面目で親切に徹したがため、患者の評判もよく、一財産を成すかに見えた。だが、「癩症がくるしめて」（胆大小心録）五十五才の春、廃業して、加島村に隠居する。医者をしている時期も、彼は学問にもできるだけ力を入れ、『漢委奴国王金印考』（天明四年）『歌聖伝』（同五年）『也哉抄』（同七年）『阿刈葭』（同七年）などの著作を完成させている。

加島村に移住した翌寛政元年六月には妻たまの養母が歿し、次いで十一月二十一日には秋成を養育してくれた律気な養母が七十六才で歿した。彼は養母へ孝行できなかったという自責の念に苦しめられる。その結果、彼自身の健康も害われ、翌寛政二年には体力の衰弱からきた白内障で左眼の明を失うに至る。だが、その後しだいに健康をとり戻して、剃髪して瑚璉尼と名のつた妻と二人で、平安の時を過ごしている。寛政六年（秋成六十才）、加島村を去り、京都へ移住する。

寛政九年十二月五日、秋成を理解し、支えてきた妻が思いがけなくも世を逝り、彼は悲しみのどん底に沈められる。白内障は左眼にまで進行し、殆んど全盲の状態となる。大坂から松山貞光尼をよんで身のまわりの世話を頼んだ。彼女はむかし上田家で召しかかえていた女中であつた。さらに秋成の友人達の世話で、恵遊尼を養女として迎えた。だが恵遊尼と秋成とは、どうもしっくりいかなかったようである。とくに寛政十一年に松山貞光尼が歿してからは養女への不満も多くなり、健康的にも不安定となる。恵遊尼の名は、文化元年頃の記事を最後として見えなくなり、秋成は孤独な生活に戻る。

秋成は養母の歿後、眼が不自由となつてからも『冠辞考続貂』や『靈語通仮字篇』などを著している。両眼が殆んど見えない頃には『山霧の記』（寛政十年）、『御嶽さうじ』（同十一年）、『よもつ文』（同

上）、『旌孝記』（孝）（享和二年）などの紀行文や雑文が多くなる。晩年、『万葉集』の解説書『金砂』（文化元年）をまとめたり、『春雨物語』を書いたりするようになったのは、一時全盲に近かった彼の眼が、寛政十年河内国の日下村にある正法寺で眼の治療をうけ、左眼の視力が回復したことと、大いに関係がある。

文化三年、秋成七十三才の春、彼はかつて住んだことのある南禅寺中に再び移り、庵を結び、『藤簍冊子』として彼の詩歌、雑文をまとめて刊行している。文化五年には数年間書きつづけてきた『胆大小心録』と『春雨物語』の推敲を了え、これを最後に文化六年六月二十七日、七十六才の生涯を羽倉信美邸で閉じる。秋成の墓は遺言に従い、南禅寺の末刹である西福寺の中庭にあり、『上田無腸之墓』と刻んである。

以上が上田秋成の生涯に関する、ほぼ定説的な事柄である。筆者も右の事実については異論のないところである。ただ、従来、秋成の病気については、五才のとき天然痘をわずらった後病弱であったとしており、『驚癩』についての分析はなかった。筆者はこの『驚癩』こそ癩癩性発作であって、たんなる小児性ひきつけではなかったと考える。それ故、秋成は死ぬまでこの発作の持病に悩まされたと思われる。そして、彼が若い頃、放蕩に陥ったのも、医者を廃業したのも、この病気を原因なのだ。これらについては本論で詳しく述べる予定である。この秋成の持病が彼の人生に大きな影響を与えていることに、我々は注目しなければならない。

彼の病気は彼の作品とも深い関連がある。たとえば、『秋成の代表作である『雨月物語』が書かれた